

《第2分科会》  
ヘーゲルと現代思想

第二分科会「ヘーゲルと現代思想」

本年はヘーゲル（1770-1831）生誕 250 年にあたることから、ヘーゲルの分科会を設定することとした。唯物論研究協会では結成以来、特にマルクスとの関係でヘーゲルは繰り返し問題にされてきているが、今回は、「実在論」を中心とした現代思想との関係を中心テーマとして設定した。現在、ポストモダニズムや「社会構築主義」などを批判するなかで登場し現在大きな話題となっている各種の「実在論」は、「思弁的唯物論」を自称するメイヤサーなどを除いて「唯物論」と必ずしも同じではないが、問題意識において重なるところが多いからである。

今回、若手のヘーゲル研究者でしかも現代思想の動向に詳しいお二人に報告をお引き受けいただくことができ、本分科会を開催できることとなった。同時に大会の前に刊行される『唯物論研究年誌』でも「実在論の現在」という小特集が組まれているので、それと可能な限り関連させてヘーゲルを中心としつつ、「実在論」にまつわる諸問題にせまる分科会にする予定である。

（司会・池田成一・岩手大学）

ヘーゲルと社会構築主義  
——バトラーのヘーゲル解釈と美しき魂をめぐって——  
岡崎 龍（一橋大学）

本報告の課題は、ジュディス・バトラーの『欲望の主体』におけるヘーゲル読解を手掛かりにしながら、『精神現象学』における「美しき魂」についての記述をもとに、社会構築主義を再検討することである。ヘーゲルと社会構築主義をめぐる問題にアプローチする手がかりをなすのが、マルクス・ガブリエルの新実在論である。ガブリエルが日本に紹介されるにあたって大きな役割を果たした講演原稿「なぜ世界は存在しないのか」（2008＝2015）においては自然主義が主たる批判対象であったのに対して、『なぜ世界は存在しないのか』（2013＝2016）においては自然主義と並んで社会構築主義が批判されている。ところが、『未来への大分岐』においては、相対主義の元凶とされる社会構築主義が徹底的に批判されるもの——しかもバトラーを直接名指す形で——、他方では客観的真理の称揚という、一見すると自然主義批判との整合性に疑問符がつく主張へと至ることになる。

実のところ、無邪気にもガブリエルが社会構築主義の急先鋒として名指すバトラーは、『問題なのは身体だ』において、自然主義と社会構築主義が同じコインの両面に過ぎないものであるという洞察を明確に示していた。むしろバトラーは、この両者の一面性を克服するものとして、「言説の物質化」という観点をもとに、あらたな視野を開くことになる。つまりこの観点によって、物質（＝身体）的実存と社会的言説とが相互に媒介しあう関係にあることが明らかにされる。

以上の背景をもとに、本稿ではまずガブリエルとバトラーの両者において〈自然主義〉と〈社会構築主義〉という対立軸がどのように整理されているかを概観する（1）。その上で、バトラーが『問題なのは身体だ』で展開した「言説の物質化」という論点を、

《第2分科会》  
ヘーゲルと現代思想

『欲望の主体』におけるバトラーのヘーゲル受容との関連で精緻化する（2／3）。これを踏まえて、ヘーゲルの『精神現象学』における「美しき魂」と呼ばれる意識の形態（ないしその死）についてのヘーゲルの叙述を詳しく考察する（4）。この寓話が重要であるのは、バトラーがルカーチの『魂とその形式』新版に際して寄せた序文でこの意識に触れて、魂と、それが生存に必要な社会的形式とのなくてはならない結びつきを強調していることからわかる。バトラーによるこの寓話への参照は、若きルカーチが近代の人間を特徴づけた「超越論的ホームレス性」という概念を念頭に置いたものであると思われるが、社会構築主義をめぐる議論にも重要な示唆を含む。バトラー、そしてヘーゲルの美しき魂の含意は、個々の物質的身体にとって社会的に媒介されたものであるところの、自らがなんであるかを分節化する能力がこの身体の生存と直結するものであることを示している。以上を踏まえて、ヘーゲルの描いた一つの寓話から社会構築主義に対して新たな論点を提起することが本報告の課題である。

『精神現象学』の「現象」性格  
——ヘーゲル哲学を通じたガブリエル新実在論の理論的・実践的射程の検討——  
飯泉佑介（東京大学）

本報告の課題は、『精神現象学』の「現象」性格とその機能を考察することによって、ガブリエルの新実在論の射程を検討することである。

現代哲学の領域では、いわゆるポストモダンの哲学や英語圏のネオプラグマティズムに代わって、形而上学や実在論・唯物論の復活を告げる新たな思潮が台頭して久しい。一方で、近年、熾烈なアイデンティティ・ポリティクスや「ポスト・トゥルース」と呼ばれる現実の問題に関連して、しばしばポストモダン哲学や社会構築主義の難点が指摘されている。このことは、行為や言語や観念ではなく、「実在的なもの」に力点を置く新しい思想動向が、理論的にも実践的にも大きな注目を集めていることを意味している。

このような新しい思想動向の中でもマルクス・ガブリエルの新実在論（New Realism）を吟味するために、本報告では、両方の思想の起源に関わるヘーゲル哲学を考察する。手がかりとなるのは、ヘーゲルの「現象（Erscheinung）」概念である。ガブリエルはその初期の論考で、『大論理学』本質論の「仮象」論とともに、「学」の「現象」を叙述する『精神現象学』全体を評価しているが（ガブリエル／ジジエック、『神話・狂気・哄笑』、2015年）、そもそも「世界以外のあらゆるものは存在する」というテーゼと「存在とは領野の中での意義（sense）の現象（appearance）を意味する」というテーゼを柱とする新実在論にとって、絶対者を「学」として肯定的に規定するのではなく、「現象知」の叙述によって否定的に構成する『精神現象学』は相性がいい。（ここでの「学」としての絶対者は、ガブリエルの言う「世界」に相当する。）本報告では、『精神現象学』の緒論と序説に基づいて、その「現象」性格を分析し、ガブリエルの洞察を深めつつ、返す刀で新実在論の理論的及び実践的射程を吟味することを試みる。

まず、理論的な論点としては、ヘーゲルが『精神現象学』の緒論で「現象知の叙述」を主張しながら、他方で「学」を予め理論的に前提している点に注目する。このとき「学」が完成したヘーゲル哲学の体系を意味するのであれば、『精神現象学』は——ガブリエルの言う——反実在論に陥ってしまう。だが、この端緒の「学」が「同一性と区別との同一性」という自己矛盾の原理を指すとするならば、その実在論的な性格が損なわれることはないと考えられる。実践的な論点としては、このような現象知のあり方が、新実在論とは異なる批判的な意義を持ちうることを指摘する。ガブリエルによれば、「世界以外のあらゆるものは存在する」という新実在論のテーゼは、あらゆる個人、あらゆる領野の対等な存在を認めつつ、全体の方向性を調整するという一種の民主主義的な要請を含むが、あらゆる現象知（としての意識の認識や行為）が自己矛盾に貫かれていることを暴露する『精神現象学』は、この要請よりも踏み込んだ批判性を伴っていると考えられる。哲学の批判性というこの論点は、改めて現実の世界における哲学の役割に目を向けさせる。そこで最後に、現実と哲学の関係という論点に関するヘーゲルの主張を踏まえた上で、この観点から新実在論の可能性と限界を明確にした。